

平沢保治さん講演

小学生中学年編

2010年3月16日収録

こんにちは
ハンセン病って何なの？
全生園ってどういうところなの？
こう思って来たかたも多いと思います

1 ハンセン病はどんな病気？

ハンセン病という病気は「悪いことした人たちがなる病気だ」、「神様やほとけ様がばちをあててなる病気」だ。また、お父さんやお母さんやおばあちゃんやおじいさんがハンセン病だと、家族がみんなハンセン病になってしまう。こういう、まちがった考えかたが長く続きました。

でも、それを、正しくときあかしたのが、ノルウェーのハンセンというえらい、りっぱなお医者さんだったのです。今から137年前（明治6年1873年）に「悪いことした人となる病気」でも、「神様やほとけ様がばちをあてる病気」でも、「家族にハンセン病の人がいると、みんなハンセン病になってしまう」。そんなことはないカゼのように菌（きん）によってハンセン病になる。こういうことを、発見した人であります。

でも、多くのお医者さんやお役人やおじさんやおばさんの中には、今までの「悪い人となる」「神様やほとけ様からばちをあてられた人となる病気」というまちがった考えをちゃんと、けじめをつけずに（そのままにして）菌（きん）が見つかって伝染病だというと、ちょっとハンセン病の人に会ったり病院に來たりしてもうつる。こういうまちがった考えかたが、みんなで言われるようになりました。

でもね、ハンセンの病気は、なかなか人にはうつらない。



う屋がつくられて、悪いことしていないのにろう屋があって、火葬場（かそうじょう）もあって、かん者さんがなくなると、かん者さんが仕事で火そうして、お寺もあって、かん者さんのおばうさんがおきょうをあげたりおそう式をしたりする。

ハンセン病資料館のとなりにはおほかがあります。100年間に、死んでもふるさとへ帰ることをゆるされない人たちが、（平成21年で）4070人が納骨堂（のうこつどう）にねまっています。

そういうことをして（ハンセン病かん者を）病院から出さない。病院に入ってもハンセン病はなおらないじゃないか、出てくる人がだれもない。わたしたちは、いったんハンセン病だといわれると、まちがって入れられた人までも、外に出ることはできなかったのです。

病院だから、お医者さんやかんごしさんや、家がこわれたらなおす人、木のていれをする人、草をとる人、そういう仕事はぜんぶ、外の人がやるべきなのに、病院に入った人たちが（ハンセン病かん者）が、仕事をさせられて、病気になった人をめんどろみる。体の不自由な人をめんどろみる。子どもでも午前中、学校行って、お昼から仕事をさせられる。こういうことが、長くつづきました。

わたしはそういうきびしい中で、中学1年生（13さい）のときに、「平沢さん、あんたハンセン病だよ」と言われました。東京大学のえらいお医者さんから、「うちでなおしてあげてもいいけれども」、「東村山にはりっぱな病院がある」。「1年で病気が治る」。こういわれました。



2 りょう養所はどんなところ

でも日本は今から102年前、明治40年（1907年）に法りつをつくって、ハンセン病の人はいやだっていっても病院におしこめちゃう。そして外に出さない。病院なのに中にろ

● 解説

平沢さんがりよう養所に入所したのは昭和16年(1941年)のことでした。その頃のりよう養所はけいむ所のような場所でした。かん者さんは寮舎(りようしゃ)とよばれるうちに生活し、りようよう所の外に出ることはゆるされなかったのです。

かん者さんが逃げられないようにするために、りようよう所のまわりにはせの高いヒイラギのかき根がありました。

かん者さんはグループに分けられ、1つの部屋で生活させられました。この写真はしょう状の軽い人が生活する部屋です。

りようよう所には子どものかん者もせいかつしていました。りよう母、りよう父と言って大人のかん者が親の代わりになって、子どもたちの面倒を見ていました。

平沢さんはお母さんにつきそわれこのようなしせつに入所したのです。



3 入所の思い出

東村山の駅から3時間もかかって歩いてきて、「全生園はどっちですか」って聞いてもだれも教えてくれない。お百しょうさんの家に行って、「全生園はどっちにいいかげんですか」ってきいてもね、みんな戸をしめて家のにぎやう。それほどこわがられた。

病院に来てみたらはだかにされて、ふろに入れられて、学生服からぜんぶとりあげられてお金もとりあげられてね、かん者さんがめんどうをみるようにいれられた。

「名前をどうするか」と言われた、なんで平沢保治じゃだめなの、入所する人は名前を変えて入る。

母は「こんな遠くじゃ」、「保治(やすじ)明日も来てあげたいけれども」と言って泣きながら帰っていく。同時に、わたしのふところにお金を入れて、「何かあった時はこれで家に帰ってきなさい」、「目と耳と口があれば」、「そしてお金があれば」、「電車に乗って家に帰れるから」。

わたしは母が帰ったあと、中学生1年生なのに、なき虫だったから、「かあちゃん、かあちゃん」となっていた。

昭和16年(1941年)12月24日 クリスマスイブの夜。今とちがって、このあたりはすごく寒くて、風がふいていた。「ヒュー、ガタガタン」。今でもそのことはわすれません、「これは大変なところに来てしまった」。



わたしたちのせんぱいのおじさんやおばさんたちは、ひいらぎのかき根の外に、にぎやうに行けないように深いあなをほらされた。土をすてることなく、学園のところに、10メートルほどの築山(つきやま)をつくって、そこから外をながめ、ふるさとをながめる丘とした。「望きょうの丘」って名前が作られたわけです。わたしも、筑波山の方を見て(ふるさが茨城県ですから)、ふるさとをながめました。

4 りよう養所の子どもたち

わたしが全生園に来たときは(入所者が)1300人いた、今は283人だけ。今は病気になる人がいないから(へっている)、子ども80人くらいいた。

わたしは少年寮(しょうねんりよう)という。子どもたちの寮(家)に入れられ、そこにはかん者さんのりよう父がいて、へやが4つあって、18畳(じょう)の部屋に12、3人、子どもたちがいっしょに生活する。

それはすごいじめにもあいました。わたしにはすばらしいお母さんがいたから会いに来てくれる、食べ物がない時代(食べ物を)持って来てくれる、手紙も来る。

でもね、同じ子どもたちのなかでも親においていかれてね、家からも、お父さんお母さんもだれも会いに来てくれない人もいる。そういう人たちはね、わたしに手紙が来るとわたしの手紙を取ってやぶいて火に入れてもやしちゃう。何か(食べ物)が来てもかってに持って行って食べられてしまう。

ある時は手足をしばられて、かものところにつるされて、今でも、左の耳の後ろに穴があいているけれども、たたかれて、中耳炎をおこして穴があいてる。

でも、わたしははをくいしばってがまんしました。皆さん、人間はがまんできる動物なんです。わたしが小学校で教わった先生は、「努力しなくてもいいから」「あきらめない」ことを教わりました。

わたしはハンセン病になって69年になりますけれども、やはり1人の人間として、ハンセン病にかかった者として、あきらめなくて、みんなのハンセン病に対するまちがった思いを直していきたい。

人間は自分が少し勉強ができた、良い物をもっていたりすると、少しいばりたくなる。

また、人からいじめを受けることがあります。でもわたしはいじめられたからといって、いじめ返しはしない。うらみをうらみで返したって、またいじめられる。くり返しになる。いじめられてもいじめ返さない。

いじめられたらどうするか。悪口言われたらどうするか。みんなで話し合って、自分1人で考えない。お父さん、お母さん、先生、校長先生、お兄さん、お姉さん、だれにでも話して、いじめが「悪いこと」だといじめる人に「気付かせる」これが大事だ、こう思います。

みなさんは「平沢さんそんなこと言ったって」、「ぼくは、私

はそんなことできないよ」と思うかもしれませんが、考えていただきたいと思います。

5 りょう養所の生活

解説

平沢さんが子どものころ、日本はアメリカや中国と戦争をしていました。戦場では多くの命が失われ、国民は苦しい生活をしいられていました。戦争が激しくなってくると、日本もこうげきを受けるようになり、りょうよう所もひ害を受けました。



戦争中、戦争に勝つために、ハンセン病の人たちも、アメリカの兵隊とたたかえる人間になれて、そういうくんれんをさせられました。

食べ物もぜんぜんない。1日にじゃがいも、このくらいの1食1個、さつまいも1つ、おなかがすいて、おなかがすいて夜ねむれない。タオルを、手ぬぐいを水でぬらして、口にくわえて、飢(う)えを、おなかをすいたのをがまんした。そういう中で、本当にみなさんに、自まんにならないけれども、人間の肉以外、食べられるものは、なんでも食べて、生きていました。

戦争というのはみんなが殺しあって、物をこわしあって、みんながびんぼうになって、本当に食べ物も食べることができない、人間のおろかな心の病、心の恥(はじ)、これが戦争です。

解説

平沢さんの少年時代はハンセン病に良くきく薬がありませんでした。しかし、昭和20年代、プロミンという薬がアメリカで作られ、ハンセン病を治せるようになったのです。ハンセン病は不治の病とあきらめていたかん者の皆さんは、プロミンに大きな期待をよせました。



6 社会復帰をあきらめる

結核(けっかく)のために作ったプロミンという薬が日本に来了。国は「ハンセン病の人は病院に入れて、死んでもらう」、国が薬を買うお金を出してくれないので、わたしのお母さんは土地を売ってお金を送ってくれた。早く良くなって家に帰りたい。

でも、さっき言ったように、悲しいかな「らい菌(きん)」は、どのくらい薬を使えばいいか当時は分からなかった。今はちゃんと分かるようになってるけれど。

解説

平沢さんは薬を使いすぎたために手が不自由になってしまいました。仕事ができなくなった平沢さんは、りょうよう所を出て生活する社会復帰の夢をあきらめました。



昭和25年(1950年)今から60年前に所内で結婚(けっこん)しました。結婚してもわたしにはあなたの方のようなかわいいひ孫も、お母さんお父さんのような孫も、校長先生のような息子をもつことも、「ダメだ」。「ハンセン病の人は子どもをもっちゃいかん」、「かわいがっちゃいかん」。こうわれ、わたしは、わたしの血を引く子どもをもつことを法律できんじられたんです。

7 生きることの大切さ

自分がハンセン病になってつらかったけれども、二度とわたしのような苦しみや悲しみを、みなさんにあたえてはいけません。

ハンセン病じゃなくて障がいがある人、あるいは、家でお父さんしかいない人も、お母さんしかいない人も、おばあちゃんといっしょにくらしてる人も。

人間はこの地上に両親を選んで、あなたたちの今いるお父さんやお母さんの、子どもになりたいと思って、生まれてくることはできない。わたしも、たん任の先生も、校長先生も同じです。

お母さんは、あなた方をこの地上に送るために、大きなおなかにして、生んでくれるために、すごい苦しみを味わって、きせき的にあなたたちは選ばれて、この世の中に生まれ出てきた人たちです。わたしもそうです。

でも命だけではしかたがない、人が生きる、これは大変なんです。

あなたがたも今、4年生から5年生になって、最高学年になって中学生になる、高校にいきたければ受験もある。おいしいものも食べたい、いろいろなものもほしい。でもこれは1人1人が生きていく、「人生(じんせい)」という道を歩みながら、あなたがた1人1人が作りだすものです。楽しいことも、苦しいことも、幸せなことも、みんなあなた方が、人間1人1人が作りだしていく、だから、生きるということは大切なんです。

あなたがたの中にはアニメのビデオで、「死んでも、天国から生きてこられる」、こう思ってる人がいたら、絶対そういうことはない。この地上に1回しか命はさずからない、だから、大切にしなければいけないのです。

あなたたちは、地球の宝物なんです。1人1人みんな宝物。

お金は必要です。知しきも必要です。物も必要です。でもそれだけじゃ、この地球で人間が住んでいけない。

わたしはハンセン病になった。不幸になった。でも、右手で字が書けなければ左手で、左手で字が書けなければ口で、(口で書くときは万年筆をこうハンカチでつまないとよだれで原こう用紙がよごれてしまう)口で書けなければ足で、足も後いしょう、今は口じゅつ筆記。年令は明日(平成22年3月17日)で83才になる。けれども、全生園でものを書くことではだれにも負けない。

園内の人たちが仕事をしなくても生活できるように、「らい予防法」という法りつを変えよう、こういう運動にも力をつけましたけれども、最初は失敗しました。そうしてみんなにいじめられる、清せの駅や、秋つの駅や、東村山の駅にいても、きっぷを売ってくれない、食べ物も売ってくれない、タクシーに乗っても、「全生園だったら下りてください」。こう言われる。

わたしは何にも悪いことしてない。体がハンセン病になって、一生けん命働いたために手足がこんなになって、火の中、水の中に(手足を)入れても、熱いか冷たいかわからなくなった。

だからこの手は、この体は、人に自まんでできるものだと思います。はずかしいと思ってない。これは一生けん命働いたり運動した、わたしの勲章(くんしょう)と思っている。

8 3つの宝物

わたしはこの地いきにいじめられたけれども、感しゃのしるしとして、緑を残していこうと、40年前から植えつけ、今、桜500本、梅200本、250種類3万本の木を植え続けています。鳥も来る、カブトムシもいっぱいいます、トンボもいます、トンボやカブトムシの住めるところは、だれもが生きていけるところなんです。



今、全生園の入所者は平きん年令は、81才 全員で283人。あなたたちが、高校生か成人式をするころ、この全生園はなくなると思います。

でもわたしたちは、全生園にある3つの宝物。ひとつは生きるために開こんして切り開いた土地、35万平方メートル、10万坪(つぼ)あまり。2つ目はこの緑。3つ目は、この地上に生を受けてきて、ハンセン病になったけれども、命がどんなに大切なか、みなさんがたもこれから大人になって、どうい道歩んでいくとしても、それは社会の中で大切なことなんです。

大学のりっぱな先生になることも必要ですし、お金のうんととれる社長さんになるのも大事です。でも、その人たちだけで世の中は回っていかない。家を建てる人、パンを作る人、バスを運転する人、電車の運転士さん。それぞれ、この地球が平和にいくための、役目をはたしているわけです。

そのことを、わたしたちはじっせんしてきた、これが3つ目の宝物です。

9 みなさんにつたえたいこと

みなさんは学校にいくことがいやになるかもしれません。また、いじめはぼう力だけじゃなくて、かげ口をされるかたもいるかもしれません。でも、ぼう力をふるうとき、自分のほおなり、体をたたいて「痛い」と思ったら、「相手をたたいたら、痛いんだ」と思ってください。

くりかえて申し上げますけど、サル山のボスザルは、何かあげると、1人で食べちゃってだれにもわけない。

あなたたちのお父さんお母さん、兄弟、先生がた、おばあちゃんおじいちゃん。何かおいしいものがあったり、あなたたちを喜ばせようと思って、一生けん命に働き、連れていってくれたり、遊んでくれたりしてくれる。お父さんはいそがしいから、お母さんはいそがしいから。そういうことをしてもらえない人もいるかもしれないけれど、そういう人たちと、お友達と仲良くしていく。

あなたたちに「人権(じんけん)」という言葉は難しいかもしれないけど、1つ目にあなたたちは「よく遊ぶこと」。2つ目はみんなと「仲良くすること」。よく遊べば友達もできるんです。そして3つ目に「勉強すること」。勉強は、そんなこと言うとお母さんやお父さん、先生にしかられるけど、いやな時はやらなくていいんです。したい時は一生けん命やる、好きなことは一生けん命やる、長所はぐつとのびる、短所もいつかは長所になる。そういうことを、ぜひ心のどこかに置いて、今日、全生園に来たことを心にとめて、あきらめないで自分が好きなことをしてください。

発行日 2011年2月25日

編著・発行 国立ハンセン病資料館

協力 平沢保治、當摩彰子、佐久間建